

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 28 年 7 月 7 日	
所属部局・職	野生動物研究センター・修士課程学生
氏名	田島夏子

<b>1. 派遣国・場所</b> (〇〇国、〇〇地域)
北海道羅臼町
<b>2. 研究課題名</b> (〇〇の調査、および〇〇での実験)
PWS 羅臼シャチ調査実習
<b>3. 派遣期間</b> (本邦出発から帰国まで)
平成 28 年 6 月 29 日 ~ 平成 26 年 7 月 4 日 ( 6 日間)
<b>4. 主な受入機関及び受入研究者</b> (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
野生動物研究センター 山本友紀子
<b>5. 所期の目的の遂行状況及び成果</b> (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
本実習の目的は、調査船に乗り、船上からの鯨類の観察法を学ぶこと、また、野生シャチを筆頭に知床に生息する野生動物についての知見を深めることである。 本実習の日程は以下の通りである。
6/29 京都発 羅臼町着 6/30-7/3 シャチ調査 7/4 羅臼発 京都着
本実習では、計4回の出航であった。全て、観光船「はまなす」をチャーターし、朝5時半出港、夕方16時ごろ帰港した。出港後は双眼鏡を用いて船上からシャチを探し、発見後は群れの動きを妨げないようできるだけ接近し、観察を行った。
一日目は午前中に1群れ、午後に2群れの合計3群れのシャチを観察することができた。出航後すぐにカマイルカの群れに遭遇した。船首や横について移動していた。この海域で今年初観察であると船長さんが言っていた。その後5時間ほどシャチが見つからなかったが、12時前に初めてのシャチを発見した。10頭程の群れで、オトナオスが2個体と、母子が2組ほどいるのではないかと推察された。母子は一緒にあおむけになり、尾びれを水面に打ち付けるテールスラップを何回か繰り返していた。また、調査船が遠ざかった後にジャンプして水面に体を叩きつけるブリーチングを5~6回行っていた。午後に出会った群れは、発信器を付けたオトナオスが群れにいた。背びれに目立つ白傷がついていたため、治癒するまでは個体識別が容易そうであった。また、背びれ下にスクリュウによってつけられたと思われる深い傷を負っている個体も発見することができた。シャチはかなり船に近づいてこちらを観察するような場面も多く、ウォッチング船や漁船との接触による事故等が増えないよう、管理をすべきであると感じた。
二日目は、午前中に3群れ、午後に1群れの観察を行った。それぞれの同時観察個体数は異なり1回目の観察は5頭程、2回目の観察は30~50頭程、3、4回目の観察は5頭であった。30~50頭程の群れの際は、観察可能な船の周りに広く分散しているが、それぞれが単独で泳いでいるのではなく、母子の2頭であったり、3~4頭が近接して泳いでいたりしていた。私の観察している御蔵島のミナミハンドウイルカにおいても、単独で泳いでいることは少ないので、同伴個体が血縁であるのか等、同伴から個体間関係を分析する事はシャチにおいても有効なのではないかと感じた。また、広範囲に分布が広がっていることが多いため、シャチにおいても“群れ”の定義は難しいと感じた。
三日目は、午前中に2群れ、午後に1群れの観察を行った。午前中は霧も深く、2回目の群れは発見しても潜ってしまい、5分ほどして遠いところに浮上する、の繰り返しであった。今までの観察ではそこまで船を避ける群れと遭遇していなかったため、行動状態やシャチの気分によっては船を避けることもあることを学んだ。長く潜られると再浮上の際に発見することが困難であるため、観察も難しかった。午後発見したシャチは、5頭程のまとまりの群れが3群れほどバラバラに移動していたが、その後真ん中で集合して一つの大きな群れとなった。呼吸も同調した後、少し水面で停止し、その後再びばらけていった。ばらけたあとも、

## 「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

ジャンプしたり、テールスラップしたりと活発であった。シャチは母系集団で、群れ同士が遭遇した際に成熟オスは交尾可能なメスと交尾すると言われているので、このようないくつかの集団が集まった際に交尾が行われるのか、何のために、どうやって一カ所で集合するのか、とても興味深い。

四日目は、一日中探してもシャチを発見することはできなかった。三日間とも、複数回遭遇することができていたため、探しても全く見つからないという経験は、船上観察の難しさを学ぶよい機会であった。

船上からの観察経験は少なかったため、揺れる船上から双眼鏡の狭い視野で噴気や背びれを探す調査はとても有意義な経験であった。また、野生のシャチがこんなに船に接近してくるとは想像していなかった。同時観察される個体数も様々で、群れの定義の難しさを痛感するとともに、船上観察からの行動観察の難しさ、海での調査ならではの発見、追跡の難しさも学ぶことができた。この経験を活かして、自身の調査地での観察に役立てようと思う。



Photo: Natsuko Tajima

体を持ちあげるコドモ



7頭程の群れ

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書  
(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



観光船の様子



船上からの観察の様子

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



船に接近してきたシャチ

**6. その他** (特記事項など)

実習を企画、取りまとめ、引率して下さった山本友紀子さんに感謝いたします。また、快く乗船させてくださった観光船「はまなす」のみなさま、北海道シャチ研究大学連合の調査員のみなさまにお礼申し上げます。